

平成 25 年度 大滝会万世大路秋期探訪会（行程実績）

報告者：大滝会特別会員 鹿摩貞男

——①オサ沢～旧大滝運搬路入口付近の明治期旧道 ②索道基地（カエル岩付近）
③ニツ小屋巡査駐在所跡 ④旧烏川橋跡 ⑤大平峠八丁（月ノ嶺山、天宝山）を訪ねて——

○日 時 平成 25 年 10 月 27 日（日） 午前 8 時 30 分～午後 16 時 00 分
○参加者 5 名 木村義吉会長、高野英治副会長、渡辺正義副会長、渡辺光義理事、鹿摩貞男
○車両 ◆鹿摩貞男車

【行程】（前処理） ・ 8 時 30 分 大滝会事務所前集合
・ 車両移動 鹿摩貞男車で東栗子トンネル福島側坑口駐車帯に移動

○大滝会事務所集合（8 時 30 分）→東栗子トンネル福島側坑口駐車帯（9 時 00 分）→（旧大滝運搬路経由）→運搬路入口（9：20）→旧万世大路へ
（名無沢・金山沢・オサ沢）（～10：30）

写真 1～6

写真 7



1. 旧大滝運搬路上り口（東栗子トンネル福島側坑口右）。
旧万世大路には換気坑取付道路（工事中）の作業員用通路を利用して登る。



2. 換気坑取付道路（工事中）、右側作業員用通路上り口。



3. 旧大滝運搬路代替通路、左栗子トンネル換気坑坑口（工事中）。
写真の通路先に旧大滝運搬路がある。



4. 栗子トンネル換気坑及び換気塔(工事中)。



5. 旧大滝運搬路代替通路、左東栗子トンネル福島側坑口



6. 旧大滝運搬路を進む大滝会木村会長他の皆さん。



7. 旧万世大路、大滝運搬路入口付近から福島側を望む。

→①旧大滝運搬路入口付近～オサ沢間の明治期旧道探索（～10時30分）→②索道基地（カエル岩付近）（～11時00分）→③二ツ小屋巡査駐在所跡（11時30分～11時50分）→烏川橋（12時10分）《昼食》（～12時50分）※烏川橋（12時50分）→④旧烏川橋跡（～13時20分）→⑤大平峠八丁（～14時20分引返す）→東栗子トンネル福島側坑口駐車帯（15時40分）→大滝会事務所解散（16時時00分）

（備考）

- 1) 「大平峠八丁」は14時30分頃までに行けるところまでで引き返す。場合によっては割愛する（二ツ小屋山・月ノ嶺山・天宝山の確認）。
- 2) 上り口は、従来の旧大滝運搬路は使用不可（無くなった）、換気所用の新設取付道路を使用する（国交省への連絡必要）。
- 3) 東・西栗子トンネル天井版撤去工事により最大30分の交通止めあり。

平成25年探訪会の目的と成果報告

- ① 旧大滝運搬路入口付近からオサ沢付近までの区間の明治期万世大路の跡の確認。
明治期万世大路は、昭和期万世大路（バイパス）の上にあったと推定されるがその確認。

(旧大滝運搬路入口から福島側へ 200~300mの地点で、明治期と昭和期の万世大路が合流したと推定される。)

⇒大滝運搬路入り口から福島側の方へ旧道を 150mほど行くと名無沢があり、金山沢(推定)、オサ沢の順に沢がある(写真8~12)。



8. 御沢(オサザワ)、万世大路から上流部を望む。



9. オサ沢暗渠部(旧万世大路横断部)を上流側から望む。
横断部の幅は、30 cm程度。左福島側、右米沢側。H241124



10. 金山沢(推定)、旧万世大路(写真下)へ流れ込んでいる。
H221106



11. 金山沢(推定)の流末、米沢側から福島側を望む。



12. 名無沢、明治期と昭和期万世大路の合流点(推定)。
旧大滝運搬路から福島側へ百数十メートルの地点。

この名無沢まで明治期万世大路と昭和期万世大路が併行あるいは重複して存在していたことがほぼ確認できた。明治期旧万世大路は、この区間で道路幅の全幅～3分の2程度が切下げられ、昭和期万世大路に造り換えられていると考えられる（写真13～19）。



13 推定明治期の残存旧万世大路(用地境界杭箇所、16写真と同一)から、合流点(名無沢)方向を望む。右側木立箇所が昭和期万世大路。米沢側から福島側を撮影。



14 推定明治期の残存旧万世大路(用地境界杭箇所 15写真と同一)に立つ筆者。合流点(名無沢)側から米沢方向を望む。左側木立箇所が昭和期万世大路。



15 推定明治期の残存旧万世大路(用地境界杭箇所)で確認する渡辺正義副会長。合流点(名無沢)側から米沢方向を望む。左側下が昭和期万世大路。合流点から2本目の境界杭。



16 内務省用地境界杭



17 推定明治期の残存旧万世大路の用地境界杭(合流点から4本目)を確認する高野英治副会長。福島側から米沢方向を望む。左側下が昭和期万世大路。



18 推定明治期の残存旧万世大路(用地境界杭箇所)。福島側から米沢方向を望む。左側が昭和期万世大路。合流点から4本目の境界杭。この先(旧大滝運搬路入口)で昭和期万世大路に合流(重複)していると推定。



19 昭和期万世大路(旧大滝運搬路入口付近)、間知石積。
旧七曲第2カーブ付近(写真上)を望む。

名無沢付近で旧万世大路と合流、その先は明治期万世大路がほとんどそのまま利用されて昭和期万世大路になっていると思われる。

「昭和の大改修」では、ニツ小屋隧道の福島側は旧七曲をバイパスするように約1.5kmの道路を新設したということになっている。この名無沢付近がニツ小屋隧道からほぼ1.5km地点になる。

⇒その合流点(名無沢)では、木村会長が昭和38年最後の炭焼きをしたと云うことが判明、その窯跡が残っていたのを発見する(写真20、21)。



20 炭焼窯跡グド(煙出し)に立つ木村会長(昭和38年最後の炭焼きをおこなう)



21 炭焼窯跡、窯口を指さす木村会長。右側草に覆われているところがドハ(土羽)と云われるところ。

その頃から細長く続く段状の地形(残存明治期万世大路)の存在は分かっていたようで、それが明治期残存旧道跡とは意識していなかったと云う。

⇒大滝運搬路入口から少し米沢側に行ったところの昭和期万世大路の上に明治期旧七曲の最初のカーブ跡を確認した。

そのカーブの福島側は、昭和期万世大路に取付いており、大滝運搬路入口辺りでは明治期と昭和期の万世大路が重複し、前述名無沢付近まで一部明治期万世大路と一部重複しながら福島側へ進んでいたと思われる(写真22~28)。

※距離関係は地形図等からのスケールアップによる大雑把なものである。



22 明治期万世大路入口、写真の奥が第1カーブ箇所。手前、昭和期万世大路、福島側から望む。二ツ小屋隧道と当該地点の高低差が約70m、明治期は七曲道路延長約500m(推定)で下り(14%勾配)、昭和期はバイパス約1.3kmで下る(5.4%)。



23 推定明治期万世大路七曲第1カーブ箇所を確認する大滝会の皆さん。



24 推定明治期万世大路。七曲第2カーブを望む。第1カーブと第2カーブの中間点付近から米沢側を望む。



25 推定明治期万世大路。七曲第1カーブ方向(福島側)を望む。第1カーブと第2カーブの中間点付近。



26 昭和期万世大路、左側旧七曲入口・合流点(重複箇所)。すぐ先が大滝運搬路入口。米沢側から福島側を望む。



27 昭和期万世大路、米沢側から福島側を望む。この区間数十メートルが明治期と昭和期の万世大路が重複していると推測される。写真右側が旧大滝運搬路入口。



28 【参考】旧万世大路昭和の大改修「石小屋～ニツ小屋区間」(ヘアピン道路5段目途中～7段目全景)、ニツ小屋隧道前ヘアピン道路。旧大滝運搬路全景 昭和39年頃



左写真

30 索道基地跡を捜索するも遺構発見できず。

② 薪炭運搬用索道基地の確認。

以前、「幻の大滝」付近で生産された炭は、その山上から旧万世大路カエル岩付近まで、索道を設置して谷を渡って（現国道13号・小川上空）運んだとお伺いしました。その万世大路側の基地跡（場所）を確認したい。また、その向かいの索道基地の確認（「幻の大滝」付近の山上の確認）。

⇒現地で確認した（写真29～34）。



29 左側、索道基地跡。右側旧万世大路、福島側から望む。カエル岩から数十メートル手前の福島側のヘアピンカーブ箇所(ビューポイント付近)。



左写真

31 谷(現国道13号,小川)を挟んで対岸の山頂(鞍部)にあった索道基地(幻の大滝側)の方向を示す(木村会長)。途中の峰に中間点となる基地を設けたと云う。



右写真

32 カエル岩(「昭和の大改修」唯一の掘割箇所) H251027



左写真

33 【参考】二ツ小屋隧道福島側(南側)、昭和期万世大路バイパス福島側のヘアピンカーブ全景。昭和9年頃撮影



上写真

34 カエル岩、米沢側から福島側を望む。大滝会榎木新吉さん撮影提供(昭和36年9月26日)

③ 明治期、二ツ小屋隧道福島側坑口前にあったと云う旧「二ツ小屋巡查駐在所跡」の確認。

以前、おおよその場所を教えてくださいました。また、別の方の情報によりますと、建物跡らしきものがあると云います。その確認。

⇒索道基地（カエル岩）から二ツ小屋隧道までの途中にて

旧大滝運搬路入口から二ツ小屋隧道までの明治期万世大路・旧七曲区間は、昭和の大改修に際し

旧道を改修して使用することは困難だとして、この区間は、大きなヘアピンカーブにより別線で新設されている（バイパス）。現在通行している旧道がそれである。明治旧道七曲の1段目2段目は先に確認したところであるが、カエル岩から二ツ小屋隧道までの区間についてもその一部を改めて確認した。七曲の4段目と5段目と思われる残存旧道が見られた（写真35～37）。



35 二ツ小屋隧道福島側、昭和期万世大路バイパス・ヘアピン道路`の中間点付近。左側に昭和の大改修で設置された石積擁壁(間知石積、空石積)が見える。



36 昭和期万世大路の下方に見える明治期万世大路・七曲残存旧道(下から4段目と推定)。



37 昭和期万世大路の上方に見える明治期万世大路・七曲残存旧道(下から5段目と推定)。左側、昭和期万世大路。

⇒駐在所跡は、結局確認できなかったけれども、おそらく当初想定の上側（谷側）ということではなく、二ツ小屋隧道前の平地（写真44参照）に所在していたものと考えられる。かつて開通当初は、福島県の出張所もあったと云われており、駐在所も後日当該箇所付近に設置されたのかも知れない。万世大路の右側の地形は段状になっており、「昭和の大改修」の際には内務省福島国道改良事務所の見張所、倉庫、職員宿舎などが建っていた場所であると思われる。また、鳳駕駐蹕之蹟や山神などについて改めて確認した。（写真38～48）



44 【参考】昭和8年頃の二ツ小屋隧道福島側の状況。左側建設中の作業員宿舎、右側見張所(出張所)等。右上の×印は二ツ小屋隧道福島側坑口



38 二ツ小屋隧道福島側坑口、右側手前に鳳駕駐蹕之蹟がある。現路面(昭和期万世大路)は、明治期万世大路路面より約2mほど盤下げされており、明治期には二ツ小屋隧道坑口付近はある程度の平地になっていたものと思われる。



39 二ツ小屋隧道右側の平地(鳳駕駐蹕之蹟あり)。米沢側より望む。



40 鳳駕駐蹕之蹟(明治14年10月3日、万世大路開通の日、御通輦(明治天皇が通られた)記念碑。この地で御小憩された)。明治41年9月12日建立(大滝御休所、円部御休所にもあり)。H251027



41 鳳駕駐蹕之蹟の東側平地(「昭和の大改修」時、内務省の見張所・出張所・倉庫・職員宿舎などがあつた)



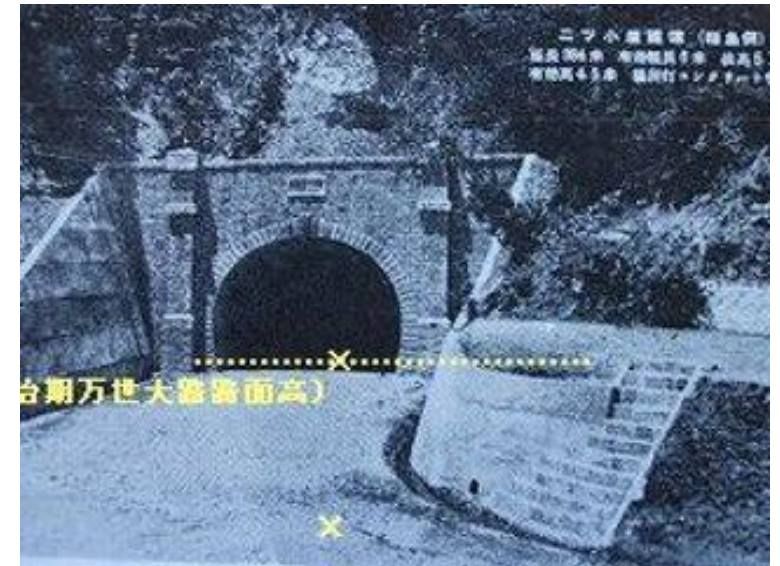
42 鳳駕駐蹕之蹟の東側平地(「昭和の大改修」時、内務省の見張所・出張所・倉庫・職員宿舎などがあつた)。かつては墓地もあつたと云う。



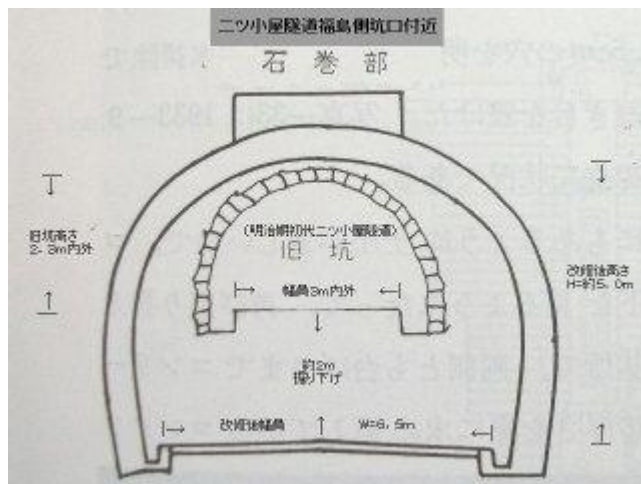
43 山神階段参道、上段の石碑には「山神」の碑銘があり、後ろには明治 14 年(ママ)12 月と彫られている。



45 【参考】ニツ小屋隧道福島側、左の石碑は鳳駕駐蹕之蹟、中央の階段は山神への参道、右側の建物は倉庫(推定)。昭和 8 年。



46 【参考】ニツ小屋隧道福島側坑口。写真右「鳳駕駐蹕之蹟」。明治期には、盤下げ前の×箇所(旧福島県出張所所在地)。「昭和の大改修」の際盤下げのため移転。



左図

47 【参考】昭和の大改修では、旧隧道の断面が幅 3m内外(完成時 5.5m)、高さ 2.3m内外(同 3.6m)を幅 6.5m、高さ 5.0mに切り抜けた。

右写真

48 ニツ小屋隧道(福島側坑口)にて



⇒この後、烏川橋へ向かったけれども、ニツ小屋隧道内ではあちこちで漏水が見られた。中でも、今回時期的なものもあるのかも知れないが、米沢側坑口の崩壊した明かり巻部分（※）から大量の沢水が滝のように流れ落ちていた（写真 49～51）。

※トンネルは通常地山を掘削して地中の中でコンクリートを打設して天井や壁を作る（コンクリート巻立^{まきたて}という）けれども、坑口などで土かぶり（トンネルと地表までの厚さ）の浅いところでは予め地表まで開削（オープンカットと云う）してしまいで地上でコンクリートの天井や壁を作ることがある。その後土砂を埋め戻し、外見上普通のトンネルのように地中にあるように見える。その地上で作られたコンクリートの天井や壁の部分を明かり巻^{まき}という。ニツ小屋隧道の米沢側は30mが明かり巻となっている。なお、トンネル部以外の普通の道路部分を明かり部と云います。



49 ニツ小屋隧道 米沢側坑口付近 大漏水 H251027



50 ニツ小屋隧道米沢側坑口



51 ニツ小屋隧道米沢側、トンネルの大漏水は万世大路を沢のようになって流れ下る。

② 旧烏川橋跡の確認。

以前、現在の烏川橋の下流に明治時代の烏川橋の跡があるとお聞きしたことがありました。

『福島県直轄国道改修史』によれば、現烏川橋の210m下流に旧橋があったという（239頁）。

⇒旧烏川橋は現地において確認できなかった。範囲を広げて機会を見つけ再挑戦してみたい。

また、烏川橋先のへピンカーブ箇所は、旧万世大路の崩落後の浸食が進んでいる。

（写真 52～63）



52 ニツ小屋隧道米沢口の翼壁区間を抜けた所から烏川橋の方向を望む。この先の右側に明治旧道の痕跡を見る。右上の山は、月ノ嶺山と思われる。なお、天宝山はこの背後になると考えられる



53 ニツ小屋隧道を米沢側へ少し下ったところに明治期旧道の痕跡らしきものが右側にある。ここから葛折りで烏川の方へ旧烏川橋まで下り、現在ヘアピンカーブとなっているところに取り付いていたものと考えられる。



54 烏川橋で昼食



55 旧万世大路の崩壊。烏川橋から100mほど米沢側にヘアピンカーブがある。その箇所が昨年(平成24年)に崩落した。昨年は一人一人通れる幅が残っていたが、崩壊は段々進んでいるようである。福島側から望む。写真上は明治期万世大路である。



56 米沢側からヘアピンカーブ箇所を望む。写真上が明治期万世大路、右側が昭和期万世大路で崩落箇所になる。



57 福島側(手前撮影位置が明治期万世大路)からヘアピンカーブ箇所を望む。写真右が米沢側(大平峠)、左が福島側(崩落箇所)。



58 【参考】写真 57 とほぼ同一箇所。左側万世大路は現在崩壊(写真 59 参照)平成 22 年 11 月 6 日撮影



59 旧万世大路崩落箇所を米沢側から望む。
旧万世大路を流れてきた水流が崩落の原因と思われる。



60 明治期旧烏川橋跡の確認に向かう。米沢側から見て昭和期万世大路は、ヘアピンカーブ箇所を右に曲がって行くと烏川橋に至る。曲がらず真っ直ぐ行くのが明治期万世大路である。そのまま行けば旧烏川橋に出るはずだ。



61 烏川に出るまでには、明らかに明治期万世大路の跡と思われるところがあるのを確認した。



62 烏川に下りて、該当箇所と思われる所を隈無く探す。残念ながら旧烏川橋遺構は見当たらない。現烏川橋から 210m 下流にあったという。



63 烏川対岸(右岸)にも明瞭な旧万世大路跡ないし旧烏川橋跡は確認できなかった。

③ 「大平峠・八丁」、天宝山、月ノ嶺山の確認。

大平峠の手前（福島側付近）は、地元では「八丁」と呼んでいたようですがその場所の確認をしたい。

また、『萬世大路事業誌』（明治14年福島県庁編）によれば、大平峠からは二ツ小屋山、月ノ嶺山、天宝山が望まれるようであるがその確認。

⇒烏川橋から大平峠までは、約1.5km続くり坂で当時もなかなか大変だったようである。文字通り「胸突き八丁」と云う言葉のぴったりする勾配のきつい坂が続く所である。大滝の方々が「八丁」と呼び習わした訳を改めて認識した。この大平峠（明治期万世大路）は、「難所七つ曲り」（『栗子トンネル工事誌』）と云われていたことと符合するものであろう。

当日は、天候が良くなかったこともあり午後2時半頃には薄暗くなってきた。峠から多分100m手前ほどで引き返した。なお、途中からは、渡辺光義さんと二人だけの探訪となった。残りの方々は「八丁」手前から戻られた。

今年は山葡萄が豊作のようである、オサ沢近辺でも見かけたけれども、こちら八丁でもたわわに稔った山葡萄を見かけた。低いところのものを少し頂いてきた。 **(写真 64~83)**



64 大平峠へのヘアピンカーブ
(烏川橋から米沢側へ約100m箇所)からの直線区間、ヘアピンカーブ付近から米沢側(大平峠)を望む。旧道が沢と化している。この流末が崩壊箇所である。



65 米沢側(大平峠)からヘアピンカーブ箇所を望む。旧道が沢となっている。洗掘が進めば万世大路は失われる可能性がある。水流の状況を確認する大滝会の皆さん。



66 ニツ小屋山を望む(ヘアピンカーブと大平峠八丁入り口のカーブの中間点)。



67 大平峠八丁入り口の最初のカーブ箇所を福島側から望む。



68 大平峠入り口のカーブ箇所から米沢側を望む。



69 大平八丁の手前を行く大滝会の皆さん



70 大平八丁、第1ヘアピンカーブ、福島側から望む。大平の「八丁」は厳密にどこからという決まりはないので、上りがきつくなるヘアピンカーブの始め辺りから云うのであろう。



71 第2ヘアピンカーブ、福島側から望む。



72 第3ヘアピンカーブ、福島側から望む。



73 たわわに捻った山葡萄(第3ヘアピンカーブ米沢側)。平成25年の秋は季節の初めこそ熊出没のニュースが相次いだ。後にはあまり聞かれなくなった。山では餌が豊作だったのかも知れない。



74 大平八丁(大平峠第3~第4ヘアピンカーブ中間点)から望む推定月ノ嶺山(標高1020m)の紅葉。この山に月がかかればさぞかし美事な眺めになるのではなかろうか。



75 第4ヘアピンカーブ、福島側から望む。



76 大平峠路、第4ヘアピンカーブ米沢側。



77 今回探訪会の到達点、大平峠100mほど手前(推定)、大滝会渡辺光義理事



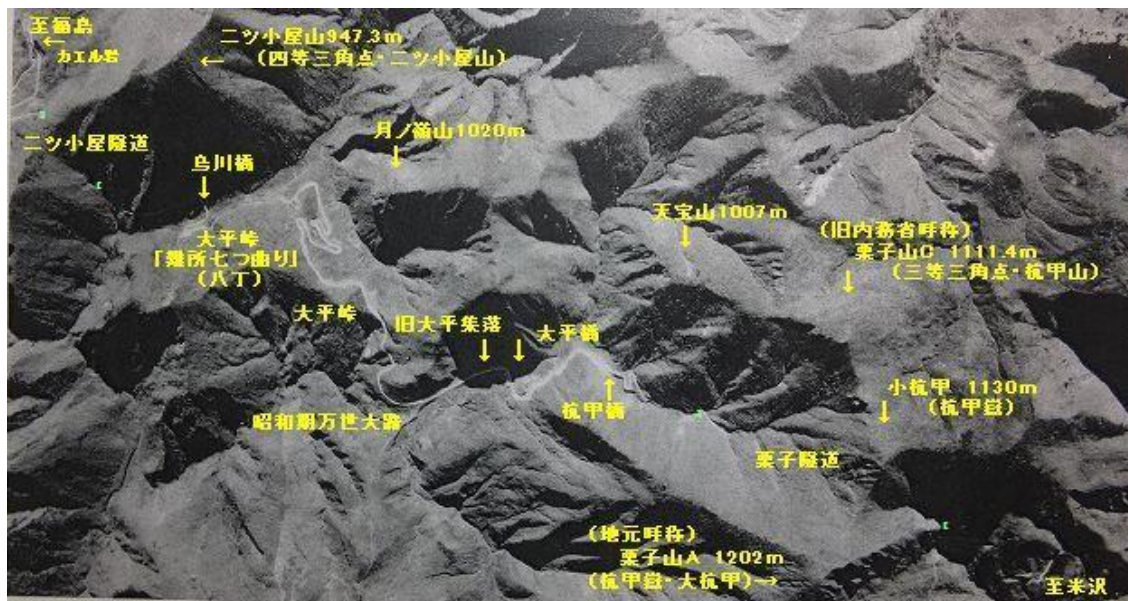
78 今回探訪会の到達点、大平峠100mほど手前(推定)から大平峠を望む。



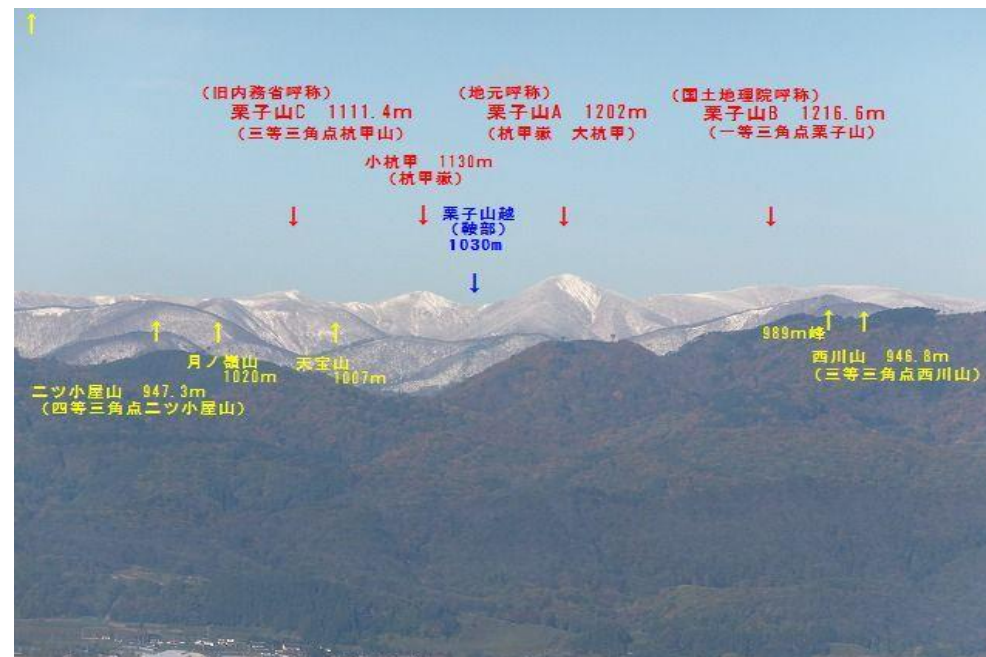
左写真
79【参考】
天宝山は今回探訪会では確認できなかった。栗子隧道手前の杭甲坂第1カーブ米沢側手前から天宝山を望む。H221106



右写真
80【参考】大平峠「難所七つ曲り」、後方の山はニツ小屋山と思われる。昭和11年10月



81【参考】ニツ小屋隧道～栗子隧道間航空写真(福島工事事務所パンフレットを基に作成)昭和32年撮



82【参考】栗子連山(栗子山ABC、小杭甲)、ニツ小屋山、月ノ嶺山、天宝山、等。福島市内信夫山鴉ヶ崎から望む H251114



83 【参考】杭甲嶽(小杭甲、大杭甲)。福島市内信夫山鴉ヶ崎か望む。 H251114

⇒結局、月ノ嶺山や天宝山については、現在の大滝会の方々にも伝承はなく『萬世大路事業誌』の記述（下記【参考】参照）から現地において想定したものである。

【参考】

『萬世大路事業誌』（福島県庁編、明治14年）掲載の杭甲嶽（栗子山）、天宝山、月ノ嶺山、ニツ小屋山の記述（「中野雑記」（中野新道の開通時点のルポ記事）、『福島県直轄国道改修史』所収111頁より）。

・杭甲嶽

「（福島県・山形県の工区境（栗子隧道福島側から109m福島側）から後ろを見ると）大山アリ。西ヲ小杭甲ト云ヒ東ヲ大杭甲ト云ウ。合テ之ヲ杭甲嶽ト呼ビ近傍屈指ノ高山トナス。」

・天宝山、ニツ小屋岳(山)、月ノ嶺山

「……。左ニ杭甲沢アリ。之ニ架スルヲ小杭甲橋ト云フ。……。是ヨリ少シク平夷ナリト雖モ又忽チ屈曲ヲナシテ下レバ一峰忽チ前ニ当ル。之ヲ天宝山ト云フ。形チ覆釜ノ如クニシテ闊葉樹尤モ多シ。」

（注：小杭甲橋は、明治期万世大路において栗子隧道福島側から100mほど手前にあった小橋。「昭和の大改修」の際に橋梁を廃止し暗渠とした。）

「……。又漸々登リー二ノ屈曲ヲ過ギ天宝山ノ中腹ヲ劇開ラキ烏川橋ニ至ルノ間、寛緩ニ下ル。……四顧スレバ（四方を見渡す）スレバ皆山又樹トシテ様ナラサルナシ（引用書注：柱のように皆すくすくと伸びている）。其左ノ大山ヲニツ小屋岳ト云ヒ其右ニ隣ルヲ月ノ嶺山ト云フ。」

（ルビ、句読点・傍点注、筆者）

⑥今回の探訪会で見た植物類 (写真 84~89)



84 灌木: ムラサキシキブ(紫式部)



85 単一樹木が紅葉している様に見えるが、実は、蔓が樹木に絡みつき枝のように見えている。



86 灌木: マユミ(真弓)



87 灌木: 吊り花マユミ(真弓)



88 樹木: ミズキ(水木)



89 野草: ウラシマソウ(天南星属)

完

「本報告書の編集に当たっては、大滝会ホームページ管理人
紺野文英様にお世話になりました。」